

序、

本日は教会墓地礼拝として、この場所で礼拝をささげています。この納骨堂にはすでに主のもとに召された方々のご遺骨が納められています。そういう納骨堂の前で、私たちが神様に礼拝をささげる。そのことには特別な意味があると思います。

### 1. 先に歩んだ信仰の先輩たちに目を向ける (3:17)

第一に大切なことは、私たちが、私たちより先に地上の生涯を歩み抜かれた信仰者の生き方、歩み方を思い起こす、ということ。それはここにご遺骨が納められている方に限りません。私たちは、共に教会生活を送り、すでに主のもとに召された多くの信仰の先輩方の姿、生き様を思い起こすことができるのではないかと、思います。それは幸いなことであり、私たちの信仰の歩みにとって大切なことです。

さきほどお読みしました、フィリピの信徒への手紙 3 章 17 節でパウロは次のように語っていました。

「兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。」

パウロはまず、「兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい」と言います。これはパウロが他の手紙でもしばしば語っていることです。ではパウロとはどのような生き方をした人だったのでしょうか。パウロは、自分が完璧な人間だから、「私に倣え、私を模範とせよ」と言ったのでしょうか。そうではありません。今日の箇所少し前、フィリピ 3 章 12 節から 14 節でパウロは次のように語っていました。

「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」

パウロは決して自分が「既に完全な者」になっているわけではない、と言います。ただ自分がキリスト・イエスという方によって捕らえられたがゆえに、何とかして捕らえようと努めている。「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走っている。それを追い求めている。パウロはそうのように生きた人でありました。そしてパウロはそのような「私に倣う者となるよう」教会の兄弟姉妹たちに勧められているのです。

またパウロは、「あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい」とも語っています。この「目を向けなさい」という言葉には、「目標に目を注ぎなさい」という意

味があります。パウロだけでなく、パウロたちを模範として、天の御国を目指して地上の生涯を歩んだ人々に、目標として目を注ぎなさい。そう言っているのです。

私たちには、パウロだけでなく、天の御国を目指して先に歩まれた信仰の先輩方が与えられている。今も御存命の方も、すでに天に召された方もいます。そういう方々の生き方を模範とする。目標として目を注ぐ。それはとても大切なことなのです。

## 2. キリストの十字架に敵対して歩む多くの人々

ではなぜそうすることが大切であり、必要なのでしょうか。パウロはその理由として、フィリピ3章18節19節で次のように語ります。

「何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。」

私たちがパウロに倣い、また他の信仰の先輩方に目を注ぐ必要があるのは、それとは異なる、それとは正反対の生き方をしている人が、現実には多いからなのです。多くの人々は「キリストの十字架に敵対して歩んでいる」とパウロは言います。パウロにとっては、キリストの十字架こそ、私たちを救う神の力、神の知恵でした（Iコリント1:17-25）。それゆえ、パウロはキリストの十字架を、私たちに救いをもたらす福音として宣べ伝えてきたのでした。しかし、現実には、そのキリストの十字架に敵対して歩んでいる人々が多い。十字架の福音を受け入れず、それを「愚かなもの」として捨て去って歩んでいる。そしてパウロははっきりと「彼らの行き着くところは滅びです」と語ります。神が私たちを救い、贖うために成し遂げられた「キリストの十字架」に敵対して歩むならば、その行き着く先は滅びである。彼らの最後は滅亡である。パウロはそういう人々のことを「涙ながらに」、嘆き悲しみつつ語っているのです。

そして「彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません」と言います。「彼らは腹を神としている」とは、彼らが食欲をはじめとした自らの欲望を神としている。自分の欲求、欲望を満たすことだけを追い求めて、生きている、ということでしょう。そして「恥ずべきものを誇りとしている」。直訳すると「その栄光は彼らの恥の中にある」となります。彼らが誇り、自分の栄光としているものは、結局彼らの恥ずべきことの中にある。さらに彼らは「この世のこと」、「地上のことしか考えていません」と言われます。彼らは自分の欲望を神とし、恥ずべきものを栄光と考え、そして地上のことだけに心を奪われている。そういう人々が多い。パウロは教会の兄弟姉妹たちが、そういうこの世の多くの人々の生き方に倣ってしまうことのように、流されてしまうことのないように、注意を促しているのです。私たちはそのような生き方、歩み方をしてはいけません。

## 3. 天に国籍を持つ私たちの望み

その理由として、パウロは20節からこう続けていきます。

「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」

「しかし、わたしたちの本国は天にあります」。この言葉はこの言葉は文語訳聖書では「されど我らの国籍は天に在り」となっています。本日の説教題はそこから取っています。

多くの人々は、キリストの十字架に敵対し、地上のことばかりを考えて歩んでいる。しかし、我らの国籍は天に在る。それゆえ、私たちは地上のことだけに心を奪われて歩んではいけない。パウロのように、また先に歩んだ信仰の先輩方にならって、天の御国を目指して歩いていくべきなのです。

今日の箇所に出てくる「国籍、本国」という言葉は市民権という意味があります。そしてフィリピの多くの人々はローマの市民権を持っていたようです。なぜなら、フィリピのいう町は、ローマの植民都市だったからです。フィリピにおいて長く兵役に服した者は、その報酬としてローマの市民権が与えられたようです。彼らはフィリピにという離れた都市にありながら、ローマの市民権を持ち、特権が与えられていたのです。

そのような背景の中で、パウロはここで「国籍、市民権」という言葉を使っているわけです。

私たちはローマの市民権を持っていませんが、日本に国籍を持っています。しかし、私たちの国籍はただ日本にあるだけではない、地上にあるだけではない。むしろ私たちの本当の国籍は天に在る、天に存在している。私たちはすでに天の国の民とされている、天の国を構成する一員とされている。その資格が与えられているからです。

国籍を取得するという事は一般に簡単なことではありません。何年以上、その国に滞在しなければならない、などの条件があります。では、なぜまだ天に行ったこともない私たちの国籍が、すでに天にあるのでしょうか。それはイエス・キリストがその十字架の死によって私たちを贖い、ご自分のものとしてくださったからです。そしてそのキリストが復活し、天に上られたからです。そのキリストに贖われ、キリストに結ばれているがゆえに、私たちはすでに天に国籍を持つものとされている。キリストによって、天にはすでに私たちの住む場所が用意されているのです（ヨハネ 14 章 2-3 節）。

そしてパウロは 20 節後半で「そこから（すなわち、天から）主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています」と語ります。

私たちは、どちらかというと、死んで天国に行く、と考えることが多いのではないかと、思います。そしてそれ自体が間違いということではありません。パウロもこの手紙の 1 章 23 節で「一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい」と語っています。私たちは死んでこの世を去ることによって、「キリストと共にいる」ことができる。死んだ者の魂は、天におられるイエス・キリストと共にいることになるのです。

しかし、私たちの救いは、死んで魂が天国に行って完成ではありません。救い主、主イエス・キリストが天から来られる時、私たちの救いは完成します。それゆえ、私たちは主イエス・キリストが天から来られることを待ち望んでいるのです。

では再臨されるキリストは私たちに何をしてくださるのでしょうか。今日の箇所の最後、21 節では次のように言われています。

「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」

キリストは、「わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださる」。「卑しい」という言葉は、「低い状態の」という意味です。私たちの今の体は弱く、もろいものです。やがては朽ちていきます。一方、復活し、天の上げられたキリストの体は、朽ちることのない「栄光の体」です。そして天から来られるキリストは、その私たちの朽ちていく体をも、ご自分の栄光ある体と同じ形に変えて下さる。

そしてキリストがそのようになさるのは、「万物を支配下に置くことさえできる力によって」と言われています。今はまだキリストの十字架に敵対し、キリストのご支配に敵対して歩んでいる人々がいます。そういう人々によってさまざまな悲惨、苦しみが生み出されている現実があります。しかし天から再び来られるキリストは、すべてのものをご自分に服従させることのできるお方、そうしてキリストのご支配は完成し、神の国も完成するのです。キリストはそのような御力をもって、私たちの卑しい体、低い状態にある私たちの体をご自分の栄光の体と同じ姿に変えてくださるのです。

その時には、キリストの再臨の時、すでに死んでいるか、あるいは生き残っているか、はもはや関係ありません。すでに死んでいる者は、栄光の体に復活させられますし、生き残っている者は、生きたまま栄光の体に変えられるのです。そうして共に栄光に満ちた天の御国を共に受け継ぐことができます。

私たちにはそのような希望が与えられています。私たちはすでに天に国籍を持つものとされているますが、同時に、その天から救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいるのです。

それゆえ、私たちはそのように歩まれた信仰の先輩方に目を注ぎつつ、私たちも天の御国を目指して、イエス・キリストに救いの希望を置いて歩んでいきたいと思いをします。